

# 「2013 山村留学全国ミーティング」のご報告

2013/5/15(水) ~ 16(木) 国立オリンピック記念青少年総合センター

この度、山村留学に携わる方々が集まり、山村留学の現状や課題を明確にし、事例発表やスキルアップ研修、国政動向等の講義を通して相互の繋がりを深め、山村留学の更なる発展と受入体制強化を目指す研修会を実施しました。

当日は30名近くの参加者にお集り頂き、今後の山村留学のあり方や、課題と現状を話し合うことができ、有意義な時間とすることができました。



## 事例発表1 「山口県岩国市 本郷地区の取り組み」

旧本郷村で始まった山村留学も今年で27年目。岩国市に合併しましたが、本郷地区のみなさんの熱意と協力で、毎年多くの子ども達が留学期間を送っています。

生活の拠点は、木造の綺麗な山村留学センター。今年も12名の子ども達と、指導員5名、事務員1名、地元調理員3名(交代制)の体制で運営しています。

行政サイドから見た運営面の課題や、留学生との日々の生活から見てきた子どもの姿と今後の山村留学について、貴重な事例をお話頂きました。

【発表者】山村留学センター所長 佐古三代治氏  
<http://hongou-sansonryugaku.jimdo.com/>



## スキルアップ研修「広報効果の高い、魅力的な写真とは」

インターネットの普及で、写真や映像を使った広報が手軽にできるようになったこの時代。

多くの山村留学地域でも、独自のHPを駆使して情報発信をしていることと思います。

そうしたコンテンツを作成する際の悩みの一つが、「魅力的な写真が無い!」ということではないでしょうか。

見る人に訴える写真があれば、子ども達の生き生きとした姿や運営者の思いを、より具体的に伝えられるはず。一方で、日々の生活の中にこそキラリと光る瞬間があるのに、なかなかそれを映像に収めるのは難しいと感じませんか。

そこで、普段使っているカメラを使って、素人でも出来る魅力的な写真を撮るコツを探るべく、プロのカメラマンにお越し頂き、研修を行いました。

基本レクチャーの後には、実際に参加者が各々写真を撮影し、その写真に批評を入れながら研修を進めました。



【講師】プロカメラマン 松村昭人氏  
子どもの頃キャンプ活動に参加し、リーダーとしても長く携わった松村氏。人物を撮る技術が評価され、主にAKB48の専属カメラマンとして活躍中。

### ☆撮影の5つのポイント☆



#### 1. 表情

子ども達の真剣な表情を撮影してみます。そのような表情を撮影するためには、撮影していることを気づかれないことが大切です。カメラを意識しない表情をとることで臨場感を表現することができます。

#### 2. 空気感(構図)

被写体を大きく中心に据えるだけでは表現できないものがあります。あえて端や下に寄せてみたり、顔以外を撮影してみます。被写体が背景、前景などとあいまって、臨場感を表現することができます。

#### 3. ピント

同じ表情、同じ構図でも、どこにピントを合わせるかによって写真のイメージが変わってきます。全体に合わせるだけでは駄目です。

#### 4. 距離感

極力被写体に近づいて撮ってみます。被写体との距離が近いと、撮影した写真に力強さが出ます。

#### 5. 撮影数

一枚一枚、丁寧に撮影するのではなく、少しずつピントや距離を変え、連続で何枚か撮影してみます。たくさんの写真の中にコレという写真がきっと見つかります。

事例発表2 「里山を活用した多様な取り組み」

様々な事業を展開する里山倶楽部は、1989年に活動を開始した団体。里山保全だけでなく、里山資源を活用した木炭やリースの販売、バイオ事業、CSR活動協力等幅広い事業展開を行っています。発表者の新田氏は、里山キッズクラブを主催し、里山の自然と風土を生かした環境教育・野外教育を実践している方で、日本的な活動を通して、子どもの生きる力の醸成を目指しています。活動を実施する上でのポイントや大切にしたい理念等がちりばめられた、興味深いお話を頂きました。



【発表者】NPO 法人里山倶楽部副代表理事  
新田章伸氏  
<http://www.satoyamaclub.org/>

**里山倶楽部が目指すもの**

**里山を守る人がいなくなっている**

今、地域の過疎化、高齢化により里山を守る人がどんどんいなくなっています。数々の活動地域でも年々放棄田畑が増え、山は荒れ始める場所すら不気味なほど多くなっていきます。

**「里山守(さとやまもり)」になる**

NPO法人里山倶楽部は、一歩のしべんてかむぎながら里山を守る「里山守」になることをめざしています。地域社会、行政、企業等と連携し、地元の特色を生かし、「里山守」を育てることが目標です。

私たちは、人工林、雑木林、田畑、里山環境地や地域の人的資源や暮らしの文化をその他のすべてを含めた里山全体を「一つ」として育つていきます。

そして、その「里山」を守っていく「里山守」になる。

そのためには、森林作業の技術習得はもちろん、対象とする里山の将来設計、収益をどう使うか(目的)の明確化、継続的に事業を行うための取組の仕組みが必要です。

プロの「里山守」になることで、里山の楽しみや暮らしのノウハウでは集まりきれない「里山」づくりを目指します。

**日本的でいこう！**

日本の環境教育 生き方、暮らし方、在り方	←	これまでの環境教育 環境問題の理解と対処
日本の野外教育 生きる力、命の教育、日常	←	これまでの野外教育 集団教育、自然理解、非日常
日本の自然、気候、風土	←	欧米の自然、気候、風土
日本の自然観、価値観	←	欧米的自然観、価値観
一体・共生の自然	←	対象・対立の自然
命に関わる活動(農林活動)	←	観察や冒険やゲーム
衣食住・生活習慣	←	活動重視
暮らしのある里山、民家	←	森の中のキャンプ場、大施設
20名規模、大家族	←	100名規模、学校

講義 「未来の学校と小規模校 ～人口減少時代の学校のあり方～」

少子高齢化が進行し、全国で学校の統廃合が進行する中、限界集落や離島問題、学区問題等を加味しながら、新しい学校制度はどのような形態が考えられるかを、お話を頂きました。

教育関連法の改正や憲法で保障された教育を受ける権利の問題など、根本課題が多い中、今後の山村留学と学校教育についての示唆に富んだお話でした。

【講師】埼玉学園大学人間学部教授 葉養正明氏  
(前国立教育政策研究所教育政策・評価研究部部長)



中山間地の学校の小規模化と学校統合政策の限度

件数	100人未満	100～200人未満	200～300人未満	300～400人未満	400～500人未満	500～600人未満	600人以上	無回答
合計	333	85	103	53	39	19	16	1
(%)	100.0	25.5	30.9	15.9	11.7	5.7	5.1	4.8

※学校統合後の学校規模数

学校統合によって、必ずしも一定規模の児童生徒数を確保できるわけではない。

学校設置区域の広域化と学習ネットワーク

- ・市町村内に1小学校、1中学校のケースの増加
- ・学校設置区域を広域化する  
⇒ 集落に学校がなくなるという問題が
- ・そこで、学校ワーク型の学校を模索する可能性は？  
⇒ 広域化した学校設置区域に一定の規模を維持できる拠点学校を設け、周辺に学び拠点を配置して、ネットワーク全体で義務教育を維持する
- ・学び拠点には、PC等を配置し情報網を手当てる。同時に、保護者・地域住民の協力を得て、学び拠点の整備を進める

論点

- Face to faceの関係性をどう持続させるか
- 子育て・教育、福祉、医療、コミュニティをセットにして
- 通学合宿や寄宿舎制の再評価
- コンパクトシティか、ネットワーク化か

不確かな未来

- 人口動態の趨勢、居住者の還流は発生するか
- 学校制度改正頼みの不確かな教育システムの未来

難問(根本問題)

- 学習指導要領の中身をどうする
- 日本人の学力とは

主催：特定非営利活動法人 全国山村留学協会

〒180-0006 東京都武蔵野市中町 1-6-7-5F

<http://www.sanryukyo.net>

tel:0422-56-0595/fax:0422-56-0351